防衛大学校本科第３０期学生及び理工学研究科第２３期学生卒業式における学校長式辞（昭和６１年３月２３日）

第4代学校長　土田　國保

防衛大学校本科第３０期及び理工学研究科第２３期の学生諸君は、本日をもって所定の教育訓練並びに研究の全課程を終了し、４年あるいは２年の小原台生活に別れを告げることになりました。ここに卒業式を挙行するに当たり、卒業生諸君に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄ある式典に、国務御多端の折にもかかわらず、御臨席を賜りました中曽根内閣総理大臣[注(1)]、坂田衆議院議長[注(2)]、加藤防衛庁長官[注(3)]をはじめ、国会議員の諸先生ほか、内外多数の来賓各位に対し、心から厚くお礼を申し上げます。また卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方、並びに在日米軍、各国大使館付武官の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚くお礼を申し上げる次第であります。また本校において、学術教育の任に当たられました教授、助教授、講師、助手の各教官、日夜をわかたずひたむきに訓練補導に全力を傾注され、あるいはまた縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた訓練指導教官及び職員各位に対しましても、学校長として深甚なる感謝と敬意を表するものであります。更にはまた、遠路をも省みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に深く感謝申し上げますとともに、ここに御子弟の成業を心からお祝い申し上げる次第であります。

４１５名の本科卒業生諸君、省みれば昭和５７年４月１日、例年なく珍しい快晴、桜花ほころびるこの小原台の中講堂で諸君を迎えた時のこ

注(1)　中曽根康弘

注(2)　坂田道太

注(3)　加藤紘一

とは、今も思い出を新たにするところであります。それからの４年間、私は諸君とともに過ごしてまいりました。諸君は学業に励み、訓練・学生舎生活・校友会活動その他数多くの試練に耐え、１学年当時と比べれば、まさに見違えるような逞しい成長を遂げられました。今や胸を張って堂々と卒業してゆく資格は、諸君のものであります。シンガポール共和国、タイ王国の留学生５名の諸君にも、心から祝福を送るものであります。

さて、諸君の自衛隊幹部としての修行は、いよいよこれからが本番であります。これから各幹部候補生学校に入り、陸・海・空それぞれ特色のある初級幹部としての素養を実地にたたき込まれ、体験と反省を繰り返し、我がものとしなければなりません。その際、特に強調いたしたいことは、防大時代における研学の道を忘れず、人間としての大きなスケールを拡げてゆくということであります。自衛隊幹部として生涯をかけて、有事に際してベストを尽くし得るように、あらゆる角度から、ひたむきな精進、模索、探究を繰り返し、その道の専門家として、更には万能選手としての資質を磨きあげてゆくべき使命をもつことを忘れてはなりません。

更にまた、私は諸君の防大生活を通じて、常日頃諸君に対し、「真の紳士にして真の武人たれ」と要望してまいりました。明治時代、少なくとも日露戦役までの我が国軍幹部は、概ね所謂武士道精神の実践者であり、そしてまた、意外に自由主義者でもあったのであります。それが不幸にして、武士道はその後形骸化し、自由主義はその真の精神を喪失し、大正から昭和に至る軍幹部の精神構造の変化は、遂に過の大戦を迎え、そして敗れ去ったのであります。私は今、再び本当の意味の自由主義精神と武士道精神を提唱したいのであります。武士道と申せば、日本的部落社会の「愧(はじ)の文化」の一態様であるとか、封建社会の上部構造における意識形態であるとか批判する向きもあるでありましょう。しかし、日本の伝統文化の中での真の武士道精神の核心を主体的に捉えるならば、それは、人間性の真実に立脚したものであると思うのであります。すなわちそれは人間愛であり、慎みであり、もののあわれを知る心そのものであり、献身と勇気と礼節を尚(たっと)しとする、古今東西にわたる武人共通の真情と良識に裏づけられた行動規範なのであります。「真の紳士にして真の武人たれ」を諸君の生涯をかけての実践目標としていただきたいと思うのであります。

次に理工学研究科６５名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。諸

君は、幹部自衛官として必要な資質の涵養、なかんずくそれぞれの分野における高度の専門的知識技能を修得すべく、２年の歳月を本校において過ごし、大学院レベルの課程を履修されたのであります。思えばあと１４年、世界は次の世紀の関頭に立つのでありますが、この２１世紀初頭における自衛隊の幹部たるべき諸君に求められるニーズは何でありましょうか。それは、一つには全人的な教養であり、二つには国際人としての力量であり、そして三つには高度の科学技術力なのであります。諸君が、この小原台において、大学時代の基礎の上に、それぞれの専攻を通じて充電を図り、将来の飛躍と大成のポテンシャルを培う機会を得たことは、真に有意義であり、２年間の第一線勤務又は技術的実務の空白を補ってあまりあるものと信ずるのであります。今後諸君は、それぞれ新たな任務に挺身せられるのでありますが、更に研鑽に努められ、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術の発展向上に尽くされるよう切望してやみません。

小原台生活の幕は、今まさに閉じようとしております。これから先、同期生同士、その融和と団結を更に強め、いかなる部署、そしていかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り合い助け合いつつ、末永く祖国日本の輝かしい将来のために、それぞれ挺身してゆかれんことを、心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。